



Title	懐徳堂文庫貴重資料の修復について
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	懐徳堂センター報. 2007, 2007, p. 119-127
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/24415">https://hdl.handle.net/11094/24415</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 懐徳堂文庫貴重資料の修復について

湯 浅 邦 弘

## はじめに

平成十四年十月十二日～二十日、大阪歴史博物館において、大阪大学総合学術博物館設立記念展が開催された。その際、博物館からの要請により、懐徳堂の貴重資料を久々に学外展示したが、その内、最重要資料の一つである「懐徳堂幅」(三宅石庵書)の表装の劣化が発見された。そこで、改めて主な資料について総合的な調査を進めたところ、緊急に修復を必要とするものが多数あることが判明した。

## 一、附属図書館への提言

これを受け、筆者は、平成十六年一月三十日開催の大阪大学附属図書館研究開発室会議において、以下の二点を緊急報告した。

### (2) 資料の劣化と修復について

平成十四年十月、大阪大学総合学術博物館設立記念展において、久々に「懐徳堂幅」などを学外展示したが、その表装の劣化が著しいことが判明した。懐徳堂資料の中には、修復しないと今後の展示に耐えないものがある。

貴重資料を有しながら、学内に専任スタッフが配置されていないという問題点が改めて指摘された。

これまで、懐徳堂文庫の資料整理や調査、見学者に対する解説、学内外の展示担当などは、主として財団法人懐徳堂記念会嘱託研究員(非常勤)が行ってきた。

しかし、財団法人の収入減から二年前に研究員の配置そのものが廃止され、現在、実質的な支援を行っているのは文学研究科中国哲学研究室の教員・学生である。

(1) 担当スタッフについて

平成十五年十一月の懐徳堂アーカイブ講座において、資料アーカイブの専門家との懇談会を持ち、大阪大学附属図書館がこのような大量の

。これを機に、改めて調査を進めたところ、緊急に修復を必要とするものは別紙の通りである。

。計画的に修復が進められるような予算措置が必要である。

添付した「要修復資料リスト」は次の通りである。

- ⑨ 懐徳堂印（大阪府学教授印） 一顆 印柄脱離
- ⑩ 李斯繹山碑 一帖 折り目裂け、虫損甚大
- ⑪ 青貝印匣 一匣 乾燥による漆のひび割れ、貝の剥落
- ⑫ 萬年先生緩歩帖 一帖 折り目裂け
- ⑬ 襄陽帖 一帖 表紙脱離、要書帙
- ⑭ 道澄寺鐘銘 一帖 表紙脱離、折れ目裂け、虫損甚大
- ⑮ 文肅先生碑 一帖 表紙布剥離、折れ目裂け、虫損甚大

#### 要修復資料リスト

。日安として緊急度をA・B・Cの三ランクに区分した。

A……このままでは資料の劣化が加速する恐れがあるので至急修復を要し、また修復をしなければ今後公開はできないもの。

B……このままでは公開にやや支障があり、また、木箱に入れるなどの保管状態を改善しなければ今後資料の劣化が進むもの。

C……現時点では公開自体は可能であるものの、額装する、または木箱に入れるなどの保管状態を改善しなければ今後資料の劣化が進むと懸念されるもの。

#### 【緊急度A】

- ① 懐徳堂幅 一幅 表装の劣化による裂け目
- ② 中井竹山画像 一幅 紙折れ
- ③ 入徳門聯 一对 乾燥によるひび割れ、補修時のガムテープ付着
- ④ 螺鈿算盤 一挺 軸・齧の脱離
- ⑤ 白鹿洞書院掲示（捲り） 一枚 乾燥によるひび割れ
- ⑥ 加藤竹里書簡集 二帖 虫損甚大
- ⑦ 懐徳堂記念会設立趣意書 一面 用紙劣化による剥落甚大
- ⑧ 蘭洲先生真跡 一帖 折り目裂け

なお、ここには具体的な書名を逐一列挙はしないが、貴重書籍の内、無帙のものについては、当然「要書帙」【緊急度C】となる。

この報告と提言は、附属図書館研究開発室員（兼任）という筆者の立場から行つたもので、これにより、附属図書館においては、懐徳堂資料の劣化と修復に関する問題について、一応の認識を共有できた。ただ残念ながら、この提言にもかかわらず、附属図書館独自の予算措置は実現しなかつた。これは、修復に多額の費用がかかると予想されたこと、また、要修復

資料の大半が、書画類など、附属図書館寄託品（文学研究科所蔵品）であったことによると推測された。

## 二、重点経費の申請

そこで筆者は、大阪大学の総長裁量経費（重点経費）の獲得を目指し、文学研究科が要求母体となる申請書の作成に向けて企画を練り直した。文学研究科会計係の高見逸郎係長、渡邊年男主任の協力を得て、平成十七年二月、申請書は完成し、平成十七年度重点経費として「懐徳堂貴重資料の修復経費」を文学研究科（懐徳堂センター）から申請した。要求要旨は「大阪大学の源流とする懐徳堂貴重資料の保存、研究及び展示のための劣化部の修復が緊急の課題」というものである。右の要修復資料の内、緊急度Aの資料を対象とするもので、要求額は約八百万円。また、要求理由は次の通りである。

懐徳堂資料とは、近世の懐徳堂から近代の重建懐徳堂を経て昭和二十四年に大阪大学に収められた漢籍、和書、書簡、書幅、絵画、聯扇子、印章などいわゆる「懐徳堂文庫」にその後大阪大学が入手した懐徳堂関連の書画、文書などを加えたもので、現在附属図書館と文学研究科に収蔵されており、総点数は約五万点に上る。近世日本の学術と文化を物語る一級の資料であり、大阪大学の貴重な財産である。

しかし、これらの資料を管理する人員と財源の不足によって、十分な管理体制が構築できないのが現状である。

近年の調査により、とりわけ貴重なものとされる資料の中に、劣化が著しく進行した資料があることが判明し、修復することなしには今

後展示等が不可能であるのみならず、取り返しのつかない段階まで破損が進む可能性がある。

こうした資料は、展示、閲覧、さらには研究資料とされることではじめてその意義を持つものであり、大阪大学としてこうした事態を放置することはできないと思われる。

このような事情により、本年は緊急に修復を必要とするものに限定し、その費用を重点経費として要求するものである。

付言するならば、資料点数の多さに鑑みて、今後は計画的に修復が進められるような予算措置がとられることを要望したい。

総長裁量経費の申請については、まず書面審査が行われ、その審査を通過した申請についてのみ、後日、個別にヒアリングが行われる。右の申請については、平成十七年三月一日、書面審査を通過したとの連絡があり、三月七日、本部事務局三〇一会議室において、この申請に対するヒアリングが行われた。文学研究科からは、江川副研究科長、池田事務長と筆者が出席した。

三月二十四日、採択の内定通知が伝えられた。但し、交付額は、申請額から二百万円減額の約六百万円であった。不足分については、文学研究科と附属図書館との間で交渉が進められ、結局、附属図書館が特別予算として二百万円を拠出し、この修復事業に協力することとなつた。

## 三、修復作業の開始

これを受けて、文学研究科では、平成十七年度に入り、具体的な作業に取りかかった。

まず、文学研究科内に選定委員会が設置された。メンバーは、奥平俊六教授、泉万里教授と筆者の三名である。そして、学内外の専門家の意見を参考にして、こうした貴重資料の修復に実績を持つ業者を数社選出し、それぞれに対して、「懷徳堂関係貴重學術資料の修復に関する提案書作成のお願い」と題する文書を発送するとともに、七月十二日、附属図書館新館貴重図書室（懷徳堂文庫）において現物を実見してもらった。すなわち、各資料の修復方法、その修復方法による利点、問題点、金額、類似の修復等諸負実績、などについて問い合わせ、回答を求めたのである。

対象とした資料、劣化の現状、必要とする修復作業内容は、各々次の通りである。

- ① 懐徳堂幅 一幅 表装の劣化による裂け目 ○表装修復
- ② 中井竹山肖像画 一幅 紙折れ ○表装修復
- ③ 螺鈿算盤 一挺 軸・鈿の脱離 ○軸・鈿の接着
- ④ 白鹿洞書院掲示（捲り） 一枚 乾燥によるひび割れ ○表装
- ⑤ 加藤竹里書簡集 二帖 虫損甚大 ○額装
- ⑥ 懐徳堂記念会設立趣意書 一面 用紙劣化による剥落甚大 ○表装
- ⑦ 蘭洲先生真跡 一帖 折り目裂け ○書帙作成
- ⑧ 懐徳堂印（大阪府学教授印） 一顆 印柄脱離 ○印柄接着
- ⑨ 李斯繹山碑 一帖 折り目裂け、虫損甚大 ○書帙作成
- ⑩ 青貝印匣 一匣 乾燥による漆のひび割れ、貝の剥落 ○貝の接着
- ⑪ 萬年先生緩歩帖 一帖 折り目裂け ○書帙作成

後日、各業者からの回答が届けられ、選定委員会において慎重な検討が進められた。その結果、主として書画類については坂田墨珠堂、器物類については（財）元興寺文化財研究所に修復を依頼することとなった。また、その過程で、修復対象資料の一部入り換えが決定した。

具体的な修復資料は次の通りである。

- 【坂田墨珠堂担当】
- ① 紙本墨書「懷徳堂幅」一幅  
(一九八一年文学部受入資料41、B9)
  - ② 紙本墨書「中井竹山肖像画」一幅  
(一九八一年文学部受入資料56、B71)
  - ③ 拓本「白鹿洞書院掲示」一面  
〔竹山書〕
  - ④ 拓本「白鹿洞掲示」一面  
〔天明二年履軒書、天生寄進309〕
  - ⑤ 紙本墨書「懷徳堂記念会設立趣意書」一面

- ⑫ 裹陽帖 一帖 表紙脱離 ○書帙作成
- ⑬ 道澄寺鐘銘 一帖 表紙脱離、折れ目裂け、虫損甚大 ○書帙作成
- ⑭ 文肅先生碑 一帖 表紙布剥離、折れ目裂け、虫損甚大 ○書帙作成
- ⑮ 朱文公大字行書四訓版 四面 湿度変化による反り・歪み ○木箱作成

⑥紙本墨書「蘭洲先生真跡」一帖

(B 119)

⑦拓本「李斯繹山碑」一帖

(B 33)

⑧拓本「萬年先生緩步帖」一帖

(一九八二年文学部受入資料 114、B 30)

⑨拓本「襄陽帖」一帖

(一九八二年文学部受入資料 115、B 31)

⑩拓本「道澄寺鐘銘」一帖

⑪拓本「文肅先生碑」一帖

(B 29)

⑫紙本墨書「第三号屏風（履軒筆）」四曲一隻

(一九八二年文学部受入資料 148)

【財】元興寺文化財研究所担当

①「螺鈿算盤」一挺

(一九八二年文学部受入資料 21、B 50)

②「懷德堂印（大阪府学教授印）」一顆

(F 140)

③「青貝印匣」一匣

(F 140)

④「螺鈿韻匣」一匣

(一九八二年文学部受入資料 17、B 50)

作業は順調に進められ、それぞれ平成十七年度末に、修復を終えた資料が返還され、詳細な修復報告書が文学研究科会計係へ届けられた。以下では、この報告書を参考としつつ、「懷德堂幅」「中井竹山肖像画」「懷德堂印」の三点に絞って、その修復の概要を簡潔に紹介しておきたい。

(1) 「懷德堂幅」の修復

三宅石庵書の「懷德堂幅」は、懷德堂文庫を代表する貴重資料であり、資料展示の際には必ず出品されるものである。しかし、経年により、表装裂地に汚損・破損が生じていたほか、不具合な旧補修箇所も確認された。

そこで、修復は、「調査」「剥落止」「補修」「補修箇所の補彩」「折損の修復」「汚れの除去」「旧裏打紙除去及び新たな裏打」という過程を経て行われた。また、桐太巻添軸を作製することによって巻径を大きくし、曲げに対する負担を緩和させるという工夫が施された。さらに、これを収蔵するための桐製の保存箱が作製された。

(2) 「中井竹山肖像画」の修復

次に、中井竹山肖像画は、経年による表装裂地の汚損・破損、不具合な旧補修箇所に加えて、本紙自体の汚損・破損が問題となつた。つまり、折損および折損から生じた擦傷、料紙の剥落があり、また、これに関連して、糊の粘着力低下による裏打紙の浮きも問題視された。

そこで、右の「懷德堂幅」とほぼ同様の修復方法がとられたが、特に、「旧裏打紙除去及び新たな裏打」については、経年により料紙の脆弱性が懸念されたため、裏打紙を全て除去し、新たに小麦粉澱粉・古糊を使用し

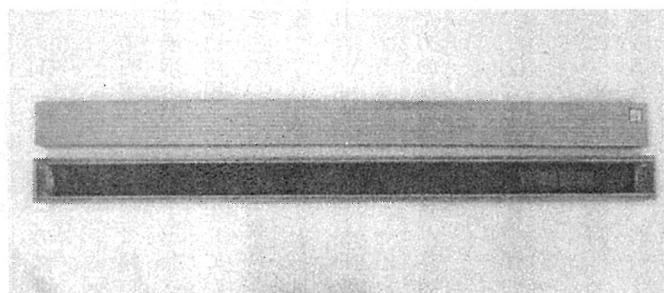
懷德堂幅



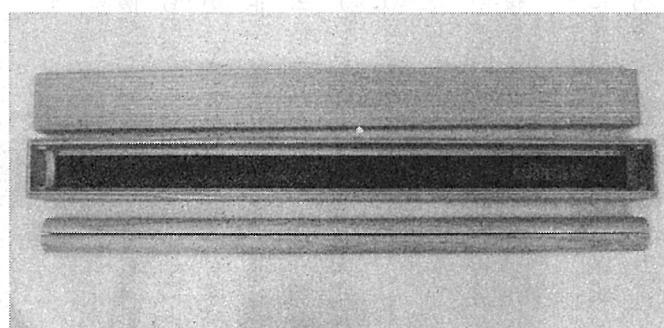
修理後 (全図)



修理前 (全図)



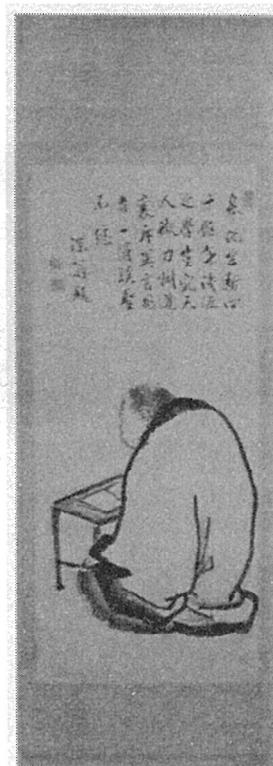
懷德堂幅 保存箱 (修復前)



懷德堂幅 保存箱 (修復後)

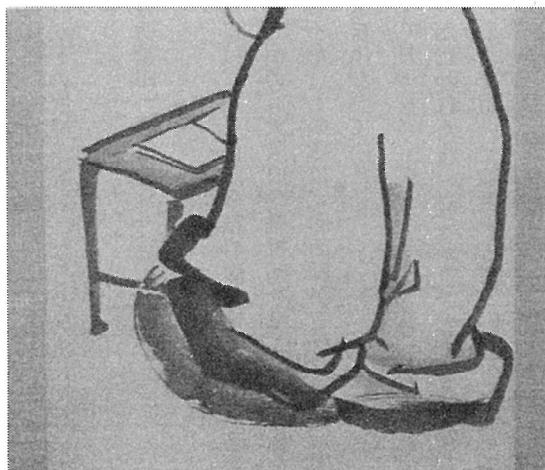
中井竹山肖像画

全図

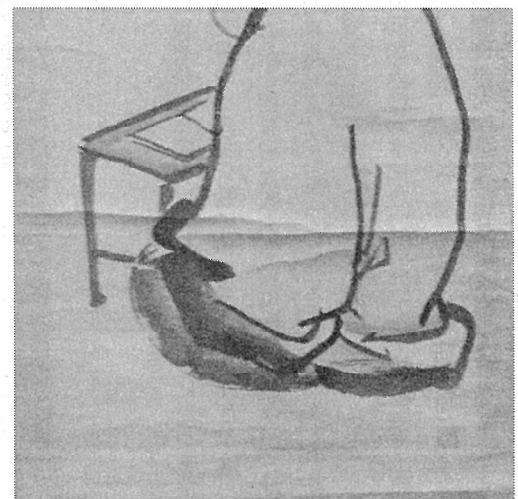


(左) 修復後 (右) 修復前

中井竹山肖像画

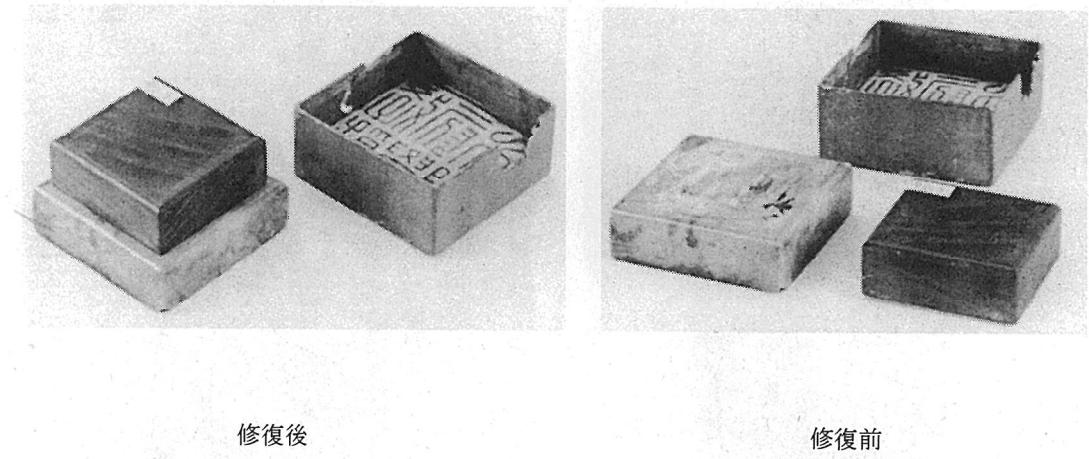


修復後部分



修復前部分

懐徳堂印



た裏打を施工し、表具装に仕立てられた。また、その際に使用する紙は、産地、生産者などの素性が明らかなものが使われた。

### (3) 「懐徳堂印」の修復

懐徳堂文庫には、約二百四十顆の懐徳堂関係印が保管されている。その中でも、中井竹山の「大阪府学教授印」は、一辺6cmを越える雄渾な印である。ところが、この印は、印面部が石材、紐が木製であるため、紐部が脱落したままになっていた。

そこで、この印章については、まず、「保存処理工程の検討」「処理前調査及び記録」が行われた後、「クリーニング（資料表面に付着した埃や汚れを柔らかい筆等を用いて除去する）」が行われた。そして、欠損部分を強化するため、アクリル樹脂を染みこませ、離脱している印柄は、エポキシ樹脂によつて接着された。

### おわりに

こうして修復を終えた資料は、見違えるようになつて懐徳堂文庫に帰ってきた。修復資料の一部が一般に初めて公開されたのは、平成十八年十月三十日（十一月二十四日、大阪大学豊中キャンパスイ号館一階において開催された特別展「〔みる科学〕の歴史——懐徳堂・中井履軒から超高压電子顕微鏡まで——」（大阪大学総合学術博物館、協賛大阪大学大学院文学研究科・財団法人懐徳堂記念会・大阪大学超高压電子顕微鏡センター）、協力大阪大学大学院工学研究科・微生物病研究所）である。

今回、資料修復の大役を果たした文学研究科では、今後も、他の資料の

修復を継続するとともに、その成果を広く一般に公開していくことを考えている。

(本研究科教授)